

農業技術情報

令和元年7月16日

ゆとりみらい21推進協議会指導部会

十勝普及センター十勝東部支所	015-572-3128
JA幕別町	0155-54-4118
JAさつない	56-2131
JA帯広大正	64-4591
日甜幕別原料事務所	54-2756
幕別町農林課	54-6605

作物の生育・作業の遅速（幕別町7月15日）

（）内は平年値（※前年値、☆春小麦は前年7/11実測値）

作物名	遅速日数	生育および作業状況	生育期節
秋まき小麦	早3	稈長 76.1 (81.1)cm 穂長 8.5(8.8) cm 穂数 668(665)本/m ²	乳熟期 6/27(7/3) 成熟期—(7/24)
春まき小麦 (春よ恋)	—	稈長 79.7(☆83.5)cm 穂長 8.8(☆8.1)cm 穂数 648(☆672)本/m ²	乳熟期 7/10(☆7/13)
馬鈴しょ	早2	茎長 73.0 (66.0)cm 茎数 3.5(3.8)本	終花期—(7/21)
大豆	早5	茎長 42.5(35.0)cm 葉数 6.6(5.6)枚	開花始 7/16(7/21) 開花期—(7/24)
小豆	早1	茎長 14.0(12.1)cm 葉数 5.2(5.0)枚	開花始—(7/26) 開花期—(7/29)
菜豆 (金時)	遅1	茎長 33.9(36.3)cm 葉数 4.0(4.0)枚	開花始 7/13(7/13) 開花期 7/17(7/16)
てん菜(移植)	早5	草丈 65.1(55.3)cm 葉数 23.0(22.9)枚 根周 24.7(22.6)cm	
てん菜(直播)	—	草丈 47.3(※46.4)cm 葉数 16.4(※15.2)枚 根周 14.4(※15.4)cm	
牧草	±0	草丈 32.0(31.6)cm 1番収穫終 7/7 (7/9)	
飼料用とうもろこし	早3	草丈 151.1(140.6)cm 葉数 13.9(13.1)枚	
なかいも(マルチ)	—	種子重 59.0(64.7)g 茎葉重 75.0(95.0)g いも長 20.6(22.3)cm いも重 16.7(20.9)g いも径 10.3(12.5)mm	
たまねぎ	遅3	草丈 84.5(79.7)cm 葉数 8.9(8.7)枚 葉鞘径 19.0(20.8)mm 球径 3.2(3.9)cm	肥大始 7/14(7/11) 肥大期 7/17(7/14)

畑作

〈小麦〉

(1) 収穫前の管理

ア 赤かび病の防除

秋まき小麦「きたほなみ」は平年比3日、春まき小麦「春よ恋」はH30比3日生育が進んでいます。収穫までの日数および、秋まき小麦で一部発生が見られている赤さび病の状況も考慮し、最終防除を検討してください。

今後の天候で急速に仕上がる可能性もあるので早めに収穫準備を済ませておきましょう。

表1 赤かび病の防除薬剤（赤さび病にも登録あり）

防除時期	薬剤名	系統名	使用濃度 (倍)	使用時期 (収穫前)	回数 (以内)
臨機(登熟期間)	チルト乳剤 25	DMI	1,000~2,000	3日	3回

イ 収穫作業に向けて

- ・コンバインによる収穫作業がスムーズに行えるよう、ほ場周辺の枝払いや草刈りを実施しましょう。
- ・ほ場内に雑草が繁茂している場合、倒伏の助長、他ほ場への種子の持ち込み等が懸念されるため、株ごと抜き取り、ほ場外へ持ち出しましょう。
- ・過去にソバを作付けたほ場や前作が春まき小麦の場合、収穫物にこれらの子実が異物として混入（コンタミ）する恐れがあるため、収穫前の抜き取りを徹底しましょう。
- ・倒伏した小麦は低アミロや細麦となりやすいため、品質向上のために収穫時に正常な麦と混ぜないように努めましょう。

〈ばれいしょ〉

本年は軟弱徒長気味の生育となっており一部で倒伏も見られます。ほ場観察に基づき適正な防除を実施して下さい。

(1) 疫病の防除

高温多湿になると夏疫病の発生も懸念されます。また、塊茎の肥大が始まっているので、今後は薬剤毎の登録有無も考慮し引き続きローテーション防除を行いましょう。

表2 疫病の防除薬剤例

薬剤名	使用濃度 (倍)	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)	成分または 系統名	浸透移行性	効果の 発現	対象病害(倍)		
							夏疫病	菌核病	塊茎腐敗
ホライズン DF	1,000 ~ 2,500	14日	4回	QoI シモキサニル	● ○	予防 治療	1,500	—	—
ブリザード 水和剤	800~ 1,200	7日	4回	シモキサニル TPN	× ○	予防 治療	800	—	—
ライメイ フロアブル	2,000 ~ 3,000	7日	4回	アミスルブロム	●	予防	—	—	2,000 ~ 3,000
プロポーズ 顆粒水和剤	750~ 1,000	7日	5回	ベンチアバリカルブイソプロピル TPN	○ ×	予防 治療	1,000	—	750~ 1,000
エキナイン 顆粒水和剤	2,000	7日	3回	ベンチアバリカルブイソプロピル シモキサニル	○ △	予防 治療	—	—	—
フロンサイド SC	1,000 ~ 2,000	7日	4回	フルアジナム	×	予防	2,000	1,000	1,000

ランマンフロアブル	1,000 ～ 2,000	7日	4回	シアゾファミド	●	予防	—	—	1,500
レーバスフロアブル	1,500	7日	2回	マンジプロパミド	●	予防治療	—	—	1,500

※○：浸透移行性が認められる ●：浸達性のみ認められる △：浸透移行性が認められるが強くない
×：認められない

※ 薬剤名が異なっても、成分（分類）が同じ場合は連用を避ける

※ シモキサニルを含む剤の総使用回数は合計4回まで

（2）軟腐病の防除

高温多湿条件、軟弱徒長気味の生育で発生が懸念されます。「6月17日付技術情報」および「平成31年度農作物病害虫防除基準」参照の上、初期防除を徹底しましょう。また、生育量に応じて水量を調節しましょう。

（3）アブラムシ類・オオニジュウヤホシテントウの防除

林地や防風林近くで多発に注意し、害虫の発生状況に応じて防除を実施して下さい。

* 薬剤の使用例は「6月17日付技術情報」を参照

〈豆 類〉

（1）大豆のべと病防除

「トヨムスメ」、「音更大袖」、「黒大豆」以外はべと病抵抗性があるので防除は不要です。

開花始に上位葉（上から見る事ができる葉）を確認し、品種に合わせて適正に防除をしましょう。

【べと病の要防除水準】

○黄大豆 開花始の上位葉の病斑面積率2.5%（病斑個数30個/葉、葉全体に病斑がある）以上。

○黒大豆

開花2～3週間前に要防除水準に達した場合→要防除水準に達した時期とその2～3週間後の2回防除。

開花始に要防除水準に達していない場合→開花期1回防除が必要

表3 大豆べと病の防除薬剤例

薬剤名	成分または分類	使用濃度（倍）	使用時期（収穫前）	使用回数（以内）
プロポーズ顆粒水和剤	CAA、TPN	1,000	21日	2回
フェスティバルC水和剤	CAA、無機銅	600	7日	3回

* 「フェスティバルC水和剤」は「トップジンM水和剤」との混用不可

(2) 大豆の菌核病防除

開花始後 10～15 日目に第 1 回散布をし、2 回目以降は発生状況に応じて 10 日毎に防除しましょう。

表 4 大豆菌核病の防除薬剤例

薬剤名	成分または分類	使用濃度(倍)	使用時期(収穫前)	使用回数(以内)	備考
トップジンM水和剤	チオファネートメチル	700～1,000	14日	4回	紫斑病に1000倍で登録あり
プライア水和剤	ジエトフェンカルブ ベノミル	1,000	14日	4回	紫斑病・灰色かび病・炭そ病にも登録あり

(3) 小豆・菜豆の病害虫防除

ア 炭そ病の防除(小豆・菜豆)

7月からの多雨・多湿時に発病が多くなります。ほ場を良く観察し、発生初期から防除に努めましょう(表5)。※「雪手亡」「絹てぼう」は抵抗性があるため防除不要

イ 菌核病、灰色かび病の防除(小豆・菜豆)

開花後に曇雨天が続くと発病しやすくなります。ほ場の生育に合わせて、適期防除に努めてください。

◎ 小豆防除適期

- 1回目：開花始後7～10日目
- 2回目：1回目防除の10日後

◎ 菜豆防除適期

- 1回目：開花始後5～7日目
- 2回目：1回目防除の10日後

表 5 小豆・菜豆 菌核病、灰色かび病を中心とした防除例

回数	薬剤名	成分または系統名	使用濃度(倍)	使用時期(収穫前)	使用回数(以内)	炭そ病(倍)
1回目	オルフィンフロアブル または ブロードワン顆粒水和剤	SDHI	2,000	7日	3回	○
		チオファネートメチル メパニピリム	1,000	14日	4回	—
2回目	ファンタジスタ 顆粒水和剤	QoI	2,000	7日	3回	○

※ブロードワン顆粒水和剤はチオファネートメチルを含むので、他剤との総使用回数に注意。

オ アブラムシ類・アズキノメイガ・ダニ防除(小豆)

本年の予報ではアズキノメイガの発生量は「並」、マメアブラムシの発生は「やや多」となっています(北海道病害虫防除所6月28日発表)。アズキノメイガは開花始の7～10日後に薬剤散布を行ってください。

表6 小豆のアブラムシ類・アズキノメイガ・ダニ防除薬剤例

薬剤名	成分または系統名	使用濃度(倍)	使用時期(収穫前)	使用回数(以内)	アブラムシ類	アズキノメイガ	ナミハダニ
アドマイヤー顆粒水和剤	ネオニコチノイド	10,000	30日	2回	○		
モスピランSL液剤	ネオニコチノイド	2,000~4,000	14日	3回	○	2,000倍	
ゲットアウトWDG	ピレスロイド	3,000	7日	3回	○	○	
ペイオフME液剤	ピレスロイド	2,000	7日	3回	○	○	
スミチオン乳剤	有機リン	1,000	21日	4回	○	○	
カスケード乳剤	I GR	4,000	7日	2回		○	○
ダニトロンフロアブル	MET I	1,000~2,000	7日	1回			○

〈てんさい〉

生育は平年より5日進んでいます。ほ場を良く観察し病害虫の発生に応じた適期防除に努めてください。

(1) 褐斑病の防除

褐斑病は前作または前年隣接ほ場で罹病残渣をすき込んだ場合、初発が早まり被害が広がる恐れがあります。ほ場の発病状況を確認し発生初期には遅れずに防除しましょう。

また、DMI剤およびカスガマイシン剤は道内で広く耐性菌の発生が確認されています。可能な限り使用回数を低減してください。また、DMI剤はマンゼブ剤と同時に使用しましょう。

表7 褐斑病防除例

防除時期	農薬名	分類または成分名	薬剤特性	使用濃度(倍)	使用時期(収穫前)	回数(以内)
7月下旬	① どさんこスター水和剤	DMI マンゼブ	予治	① ② 500	21日	4回
	② ビートスター水和剤					
	③ ゲットクル水和剤 *上記のいずれか			③ 500	21日	2回
8月中旬	グリーンダイセンM水和剤	マンゼブ	予	500	21日	5回

*マンゼブを含む剤の総使用回数は5回まで

(2) アブラムシ類・ヨトウガの防除

別系統剤による輪番防除を実施し、連用とならないよう予防防除を実施しましょう。また8月中旬以降の発生状況により薬剤処理回数の削減を検討しましょう。

ヨトウガは幼虫が大きくなるにつれて薬剤の効果が低減しますので、食害を確認したら合ピレ剤の混用を検討しましょう。

表8 害虫防除例

防除時期	対象害虫	農薬名	分類	使用濃度(倍)	使用時期(収穫前)	回数(以内)
7月下旬	アブラムシ	アクタラ顆粒水溶剤	材ニコチノイト	3,000	7日	3回
		または ダントツ水溶剤		4,000	14日	3回
8月中旬	ヨトウガ	カスケード乳剤	I G R	4,000	7日	4回

(3) 葉腐病の防除

葉腐病は高温多湿条件で多発します。発生が見られたら直ちに防除を行ってください。

表9 葉腐病の防除薬剤例

農薬名	系統名	使用濃度(倍)	使用時期(収穫前)	使用回数(以内)
モンカットフロアブル40	SDHI	1,000	14日	4回
リンバー顆粒水和剤	SDHI	4,000	7日	3回

野 菜

<ごぼう>

(1) アブラムシの防除

アブラムシが寄生した葉はゆるやかに裏側に巻き、生育初期に多発すると生育が阻害されます。発生が確認された場合は、初期に防除を実施してください。

表1 アブラムシの防除薬剤例

薬剤名	系統名	使用濃度(倍)	使用時期	回数(以内)
エルサン乳剤	有機リン	1,000~2,000	収穫7日前	3回
ハイスロイド乳剤	ピレスロイド	2,000	収穫7日前	4回

(2) 黒条病の防除

黒条病は、低温多湿条件下で発生しやすくなります。収穫予定の1ヵ月前に発生すると、減収につながるため注意が必要です。ほ場が茎葉でふさがる前に、予防防除を行ってください。

表2 ゴボウ黒条病の防除例

回数	時期	薬剤名	成分名	使用濃度(倍)	使用時期	回数(以内)
1回目	7月下旬	フロンサイド水和剤	フルアジナム	1,000	収穫21日前	3回
2回目	8月上中旬					

<にんじん>

(1) 軟腐病の防除

軟腐病は高温多湿条件下で発生しやすくなるため、注意が必要です。ほ場を確認し、防除を実施してください。

※薬剤については、「7月2日技術情報」「平成31年度農作物病害虫防除基準」を参照。

<キャベツ・はくさい>

コナガの飛来頭数は、7月1日~7月10日の9日間にキャベツで15頭、はくさいで66頭と発生が続いています。継続して防除を行ってください。

(1) はくさいの軟腐病防除

気温が高まっており、軟腐病の発生に注意が必要です。

※薬剤については、「7月2日技術情報」「平成31年度農作物病害虫防除基準」を参照。

(2) キャベツの株腐病防除

株腐病は、結球~収穫期の高温・多湿条件下で発生しやすくなります。結球初期から予防的に防除を行い、発病株は早期に抜き取りましょう。

表3 キャベツ株腐病の防除薬剤例

薬剤名	系統名・成分名	使用濃度(倍)	使用時期	回数(以内)	注意事項
リゾレックス水和剤	トルクロキメチル	500~1,000	収穫7日前	3回	—
アミスター20フロアブル	QoI	2,000	収穫7日前	4回	黒斑病に登録あり。

(3) 菌核病の防除

結球期に入り、菌核病に注意が必要です。キャベツ・はくさいの菌核病は、気温20℃前後、多湿条件下で多発するため、予防防除を行いましょう。

表4 キャベツ・はくさい菌核病の防除薬剤例

薬剤名	系統名	使用濃度(倍)	使用時期	回数(以内)	キャベツ	はくさい
アミスター20フロアブル	QoI	2,000	収穫7日前	4回	○	
ファンタジスタ顆粒水和剤	QoI	2,000~3,000	収穫3日前	3回	○	
		3,000				○
ロブール水和剤	ジカホキミト	1,000	収穫7日前	4回	○	
			収穫14日前	3回		○

(4) チップバーンの発生に注意

降雨後の高温等で急激に生長が進むと、カルシウムが欠乏し、チップバーンが発生しやすくなります。品質低下を防ぐため、カルシウムの葉面散布を実施してください。

<レタス>

引き続き、ナモグリバエ、軟腐病、腐敗病の発生に注意し、適期に防除を実施してください。

(1) ナモグリバエの防除

防除の際は、葉裏まで薬剤がかかるように散布してください。

※薬剤については、「平成31年度農作物病害虫防除基準」を参照。

(2) 軟腐病・腐敗病の防除

軟腐病と腐敗病の発生に、引き続き注意が必要です。移植前のほ場では、降雨後に停滞水が発生しないようにサブソイラー等で排水対策を行ってください。

※薬剤については、「7月2日技術情報」「平成31年度農作物病害虫防除基準」を参照。

<たまねぎ>

茎葉の生育が旺盛な時期であるため、生育に合わせて薬剤の散布水量を増やしましょう。

(1) ネギアザミウマの防除

気温の上昇および小麦収穫に伴い、ネギアザミウマの発生量が増加し、被害が多くなります。こまめにほ場観察を行い、適期防除に努めましょう。

表5 ネギアザミウマの防除例

時期	薬剤名	系統名	使用濃度(倍)	使用時期	回数(以内)
7月中旬	リーフガード顆粒水和剤	ネイストキン	1,500	収穫3日前	3回
7月下旬	ディアナSC	スピノシン	2,500~5,000	収穫前日	2回
8月上旬	トクチオン乳剤	有機リン	1,000	収穫7日前	4回

(2) 細菌性病害の防除

7月上旬以降、りん片腐敗病と軟腐病の発生が散見されます。軟腐病は、25℃以上の高温・多湿条件で発生が助長されます。強風や激しい降雨の後は発生の可能性が高まるため、ほ場を良く確認し適期防除に努めてください。

表6 たまねぎ軟腐病の防除例

時期	薬剤名	成分名	使用濃度倍	使用時期	回数(以内)
7月中旬	コサイド 3000	水酸化第二銅	1,000~2,000	—	—
7月下旬	バクテサイド水和剤	ストレプトマイシン・水酸化第二銅	500~1,000	収穫7日前	5回
8月上旬	コサイド 3000	水酸化第二銅	1,000~2,000	—	—

※薬害軽減対策として、クレフノン200倍を加用する。

(3) 白斑葉枯病・小菌核病の防除

白斑葉枯病は倒伏前に多発させると球肥大に影響を及ぼすため、計画的に防除を実施してください。

表7 たまねぎ白斑葉枯病・小菌核病の防除例

時期	薬剤名	系統名・成分名	使用濃度(倍)	使用時期	回数(以内)	白斑葉枯病	小菌核病
7月中旬	シレキキュアフロアブル	DMI	2,000	収穫前日	3回	○	○
7月下旬	フロンサイドSC	カルジウム	1,000~2,000	収穫3日前	5回	○	
8月上旬	ファンタジスタ顆粒水和剤	QoI	2,000~3,000	収穫前日	5回	○	○

(4) ベと病の防除

過去に発生したほ場では、予防防除を行ってください。発生を確認した場合は、治療効果のある薬剤で早期に防除を行い、蔓延を防ぎましょう。

表8 たまねぎべと病の防除薬剤例

薬剤名	成分名	使用濃度(倍)	使用時期	回数(以内)	注意事項
グリーンダイセンM水和剤	マンゼブ	400~600	収穫3日前	5回	予防
リドミルゴールドMZ	マンゼブ・メタラキシル	1,000	収穫7日前	3回	予防・治療
レーバスフロアブル	マンゼブロパミド	2,000	収穫前日	2回	予防・治療

～農薬の安全使用と農作業事故防止～

- ★農薬散布において、「農薬の安全使用基準」を遵守し、散布の高さを低くし周辺作物への飛散防止に努めましょう。
- ★散布時は、必ず防除用マスクを身に付け、肌をしっかり覆うようにしましょう。散布が終わったら肌の露出部を良く洗い、うがいをしましょう。
- ★作業機の連結時での「挟まれ」事故や「機械昇降時の落下」事故に、十分注意しましょう。
- ★水分と塩分をしっかりととり、熱中症に注意しましょう。